

# 以身伝しんぶん

## 展覧会ボランティア研修に参加



ボランティア研修の様子

9月21日と23日、展覧会「以身伝心」に参加するボランティアスタッフに向けた研修会が開催された。スタッフの中には、記者クラブの活動と兼ねているメンバーもいる。

9月21日(金)午後3時、奥村家住宅にて、ボランティアスタッフの事前研修が開催された。30名のボランティアが参加した。私もスタッフの一人として、この研修会に参加した。

初めに、担当者の方が、

記者レポート

### 作者の草薨さんも来館

2階に上がると、窓に向かって置かれた机に向かい、ペンを忙しく上下に動かす男子。小学校の低学年ほどだろうか。机に置かれた白い紙に、とんとんと小さな、しかし一つとして同じでない点々が広がっていく。少しとなめ後ろから眺めていた私に一言漏らし

ペンの持ち手を変え、また点々を生み出していった。これは出展者の一人である、草薨太さんの制作活動体験コーナーでの風景。指に伝わる振動と、それから生み出される音と色の広がり、ただ純粹に楽しんでたその男の子に、作者本人の姿がだぶって見えたよう

は本作者の作品と、その制作風景を映した映像が。また、作品から着想を得て制作された約10分間のオリジナルストーリーを鑑賞できるスペースもある。視覚だけではない作品の楽しみ方をぜひ体験してみてくださいいかがでしょうか。

(記者 相馬)



創作体験コーナーでの草薨さん

NOOMAの2階の作品の出展者、草薨太さんがご来場されました。さっそく体験スペースで絵を描かれました。1階まで紙にペンを打ち付ける、パンパン、という軽快な音が聞こえます。30色ペンを次々と使い描いていかれます。

「いつもはこんなに沢山の色は使わないのに」とお母様。ほぼ30色使い「終わり」の一言で終了。カラフルな

展覧会は、だれもが楽しめる展覧会づくりをめざし、五感を通して、鑑賞体験が深まることを念頭に企画された。

会場内の点字による作品や作家の紹介や音声コンテンツという音声で媒介した方法や、直接作品に触れることが可能な作品も展示されている。細心の注意を払って、たくさんの方々が会場内でなされて

9月23日の午後、当展「以身伝心」から第2会場の奥村家住宅にて、第2回「ボランティアスタッフ事前研修」が行われた。ボードレス・アートミュージアムNOOMAは2004年から開館し、数々の展覧会を行ってきた。2014年には周辺地域の町屋を舞台にし、複数会場で開催された展覧会「アール

9月23日の午後、当展「以身伝心」から第2会場の奥村家住宅にて、第2回「ボランティアスタッフ事前研修」が行われた。ボードレス・アートミュージアムNOOMAは2004年から開館し、数々の展覧会を行ってきた。2014年には周辺地域の町屋を舞台にし、複数会場で開催された展覧会「アール

冊子の活動マニュアルにそって、開催時の活動の内容や注意事項を説明された。そして引き続き、学芸員の方が、展覧会の全体像を説明し、身体をテーマに開催した展覧会の意図を話された。

個々に展示された作品を鑑賞しながら、作家の経歴や創作背景も丁寧に解説されていた。

1回目は9月21日(金)に行われていた。今回の展覧会には、総勢50名のボランティアスタッフが応募されています。皆様、いざ何かの日程で事前研修会に参加されました。

ボランティアスタッフは奥村邸の前庭でNOOMAスタッフから今回の展覧会の「基本業務」と作品紹介のレクチャーについて説明を受けました。今回の展覧会では、視覚障害のある方も楽しんでいただけるコンテンツを導入されています。

ボランティアは総勢63人。県内外から様々な世代、様々なバックグラウンドを持った方が参加する。中には親子での参加、障害のある方なども。来館した際、時間のある方はボランティアのおしやりも楽しむのもいいかもしれない。

(記者 相馬)

9月23日(日)今回の展覧会の会場のひとつである奥村邸で、2回目のボランティアスタッフ研修会が、26名の参加のもと行われました。

1回目は9月21日(金)に行われていた。今回の展覧会には、総勢50名のボランティアスタッフが応募されています。皆様、いざ何かの日程で事前研修会に参加されました。

9月23日の午後、当展「以身伝心」から第2会場の奥村家住宅にて、第2回「ボランティアスタッフ事前研修」が行われた。ボードレス・アートミュージアムNOOMAは2004年から開館し、数々の展覧会を行ってきた。2014年には周辺地域の町屋を舞台にし、複数会場で開催された展覧会「アール

ボランティアは総勢63人。県内外から様々な世代、様々なバックグラウンドを持った方が参加する。中には親子での参加、障害のある方なども。来館した際、時間のある方はボランティアのおしやりも楽しむのもいいかもしれない。

(記者 相馬)

並べられたこれらは一般的な「車イス」ではない。確かに、背もたれが平坦でなく、それぞれ違う形で一部はこつと隆起し、また凹んでいる。その凹みの奥行きや広がりもさまざま。どうやって座るのか。これは「横たわる生活」であった、自力で姿勢を保つことが困難な方が、起き上がり

「心をもつて、心を伝える。身体を通して、心を伝える。」学芸員の方の肉声のことばが、今も心に響いてくる。どの方にも楽しんで頂けるように、学芸員の方のメッセージを刻みながら、ボランティアをさせていたできたと思った。

(記者 中島)

「座る」姿勢を保持するための装置。福島の森田寅さんが、使用者一人ひとりの「身体」を思い、制作した。使用者を包み込み、支える背もたれ。凸と凹みの影は、使用者の身体そのもの。眺めるうち、その人の姿が浮かんで見えてくるようである。ふいに、小学生くらいの子が、ひよいと座ってみせた。「どうやって?」と考えていた大人たちが、「自分も触って、座ってみればいい」と、以「身」伝心のテーマに立ち返った瞬間だった。

(記者 辻純)



### 体験コーナーで草薨作品制作を体感

NOOMAの2階の作品の出展者、草薨太さんがご来場されました。さっそく体験スペースで絵を描かれました。1階まで紙にペンを打ち付ける、パンパン、という軽快な音が聞こえます。30色ペンを次々と使い描いていかれます。

「いつもはこんなに沢山の色は使わないのに」とお母様。ほぼ30色使い「終わり」の一言で終了。カラフルな

作品ができました。今日はアームカバーをさしてないので、腕にインクが着いてしまつたのを皆に見せてくれました。とてもチャームングな方です。製作の時の音は3階奥の部屋で流れるオリジナルストーリー「ちようどその時」の中で聴くことができます。

(記者 羽作家)

ボードレス・エリア記者クラブInstagram更新中

